

園内研修のプロセスから (2)

—異年齢交流を支えるための指導計画の検討—

○入江 礼子 内藤 知美
(鎌倉女子大学・同幼稚園部)

I. 研究の目的

Y幼稚園では2001年度より保育の見直しを行なっている。その初期の目的の一つは「遊びを中心とした保育を展開し、一人ひとりの育ちを理解した環境作りを行なう」ことであった。2001年度はこの第一段階として園内研修と保育実践の変容の問題を取り上げて検討を行なった。その結果、園内研修における指導計画と保育後記録の重要性が明らかになった¹。Y幼稚園ではその後も引き続き園内研修を軸として保育実践を続けている。2年目にあたる2002年度はそれまで3歳児から5歳児までの異年齢の交流がほとんどなかった状況を少しでも改善するため、異年齢交流を保育の一つの柱として実践を行っている。ここでは保育実践を支える園内研修の中核をなす指導計画の検討を「異年齢交流を支える」という観点から行なっていく。

II. 研究の方法

- (1) 対象：Y幼稚園での2002年度の保育実践
- (2) 園児数及び保育者数：
園児 55名、保育者 8名
(内訳) 3歳児：12名(担任1名) 4歳児：16名(担任1名) 5歳児：27名(担任2名) 園長・副園長・主任・フリー各1名
- (3) 方法：園内研修議事録と指導計画(週日案)の検討
園内研修は原則として週1回月曜日の保育終了後行なっている。メンバーは全保育者。毎週担任から出される週日案の検討を軸に全メンバーがその時々で取り上げたい話題を中心に話し合い形式で進めた。その内容は議事録に残した。
- (4) 分析資料：
 - ① 各担任から出された週日案
 - ② 園内研修議事録
 - ③ 保育後記録

III. 異年齢交流を支える指導計画(週日案)の変遷とその意味

(1) 2001年度の実態

Y幼稚園では2001年度以前はクラスを基本とした保育が活動の中心を占めていたため、他のクラスと交わっての活動は少なかった。しかししょうだいが少ないY幼稚園の子どもたちの育ちを保障するために2001年度は

3歳児から5歳児までが混ざり合って生活できる環境を少しずつ整えたいという思いをもって保育を進めた。図1は2001年度の週日案のフォームである。

図1 Y幼稚園指導計画(週日案1)

指導計画は週日案の形で作成した。項目は「ねらい」「予想される子どもの姿」「保育者の援助と環境の構成」「環境図と簡単な内容」「週の流れ」「今週の行事」「コメント」から成っている。特に4月末以降「環境図と簡単な内容」の部分に子どもたちの予想される位置、活動、関わりを入れることを試みるようになってから、子どもたちが幼稚園のどの場で活動しているかが担任保育者だけではなく、他の保育者にも視覚的にわかるようになった。また実際の保育実践においても各保育者に子どもも理解の深まりがみられ、保育後にも具体的な子どもの話が多く出るようになった。7月に入ると週日案が「計画」に終わってその後の検証が弱くなることが話し合われ「予想される子どもの姿」欄に「先週の子どものとらえと反省」を入れるように努力した。その結果、保育が計画→保育実践→省察→計画の修正→保育実践という連続を生んで行われるようになった。具体的な保育実践の場では1学期は学年を越えて遊んでいる姿はほとんど見られなかった。しかし2学期、10月初旬になると従来のクラス別の生活に慣れている5歳児は保育者の指示がない限り3・4歳児と交わることがほとんどない状態が続いていたが、2001年度からY幼稚園で生活をはじめた3・4歳児はクラスを超えて混ざり合う姿がみられるようになった。保育者にはその状況を5歳児も含めた全園的なものにしていくためにティーム保育を行なっていく必要性和それに見合った指導計画を立案することが課題となった。

(2) 2002年度1学期6月半ばまでの実態

2002年度は前年の幼稚園の実態を踏まえて「異年齢交流」を保育の明確な柱の一つとした。前年度は5歳児と3・4歳児のクラスでは一日の流れが違ったが、2002年度はほぼ同じ流れとなり、3学年が出会うチャンスも多くなった。そのため園内研修で担任外の子どもも含めてしっかりとらえていく必要性が認識され、週日案の形式

¹ 入江 (2002) 「園内研修のプロセスから—初期段階における保育実践の変遷とその諸相」

を大幅に変更することになった。図2は2002年度初めの週日案のフォームである。

図2 Y幼稚園指導計画（週日案Ⅱ）

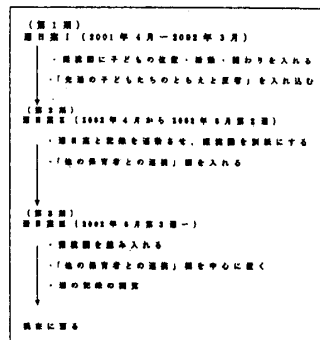
項目は「幼児の姿」「週のねらいと内容」「予想される子どもの姿」「環境の構成と保育者の援助」「環境図（人的環境・物的環境・配慮・子どもの動き）」「他の保育者との連携」「行事及び一日の流れ」とし、保育後記録は「週の記録」ということで別紙に独立させ、次週に回覧することにした。

環境図は1枚の週日案に再度組み込まれたが、書き方そのものの質が上がったことと、園内研修においては1枚にまとまることで環境図から子どもの動きをイメージしやすく、かつ保育者同士の共通理解も深まる形となった。また、この時期子どもたちの遊びが異年齢の交わりを持ち始めた結果、それぞれの保育者が連携しなくては日々の保育にあたれないことが共通理解となった。そのため「他の保育者との連携」欄を週日案の中心の位置に移動し、かつ量的に増やすこととなった。この欄に書かれる内容は保育者が協力して行なわなくてはならない作業の確認や、子どもたちに関して確認しておきたいこと、また共通に使う場所の提案や確認等が記されている。さらに園内研修の折に口頭で述べられるだけでは実現しにくかった各保育者からの提案が文章化されることでしっかりと共通のものとして認識されるようになった。特に9月以降の園内研修においてはこのことをきっかけに異年齢で混ざり合っている保育の内容についての話し合いが進むことも多くみられるようになった。また園内研修では発言の少ない若手保育者の提案が、この欄に記入されることが多いのもその特徴となっている。

IV. まとめと今後の課題

図4はこの過程をまとめたものである。

図4



(3) 2002年度1学期6月後半から12月までの実態

環境図が日々の実践においては重要であるため別紙として強調したが、結局はその検討をする時間を捻出できなかったことを踏まえて再度週日案のなかに組み込む方に戻した。図3は再度改訂した週日案である。

図3 Y幼稚園指導計画（週日案Ⅲ）

異年齢保育を実践していくためには「園全体で子どもの共通理解をすること」、「保育者間の連携を園内研修で検討すること」、またそのための指導計画作成上の基礎的な事項として「意識的な保育者間の連携を指導計画に入れ込む」必要性があげられることがわかった。

しかし詳細にその実践過程を検討すると現時点では担任の書いた環境図のなかに他クラスの子どもの記述がない。異年齢保育を支えるためには担任もまた異年齢の子どもたちを保育しているという意識が必要であるが教材の準備も含めて担任保育者の意識はそこまで達していないので、この点が今後の課題としてあげられよう。